令和５年度　後期日程　入学者選抜学力検査問題　歴史学科　歴史　解答例

【設問】 つぎの1～4より２題を自由に選択して論述せよ。答案は，それぞれ別の解答用紙に記し，選択した番号を明記すること。(配点　１問につき 100 点)

1室町幕府による京都支配の構造について市政・軍事・財政などの点から論述せよ。なお，論述にあたっては，下の語句をすべて使用し，使用した箇所には下線を引いておくこと。

足利義満　　応仁の乱　　土倉役・酒屋役　　侍所　　花の御所

出題意図・採点基準

室町幕府は武家政権としてはじめて京都に拠点を置いた。鎌倉幕府や朝廷の京都支配との相違を念頭に論じて欲しい。日本全国の中での京都の位置づけ、足利義満の花の御所、将軍一有力大名の在京体制、四職の位置づけ、侍所の役割、京都における都市的課税の内容、応仁の乱による京都支配の弛緩・衰退（守護在京体制の崩壊）について具体的に述べられているかを採点基準とした。

解答例

南北朝合一を実現した<u>足利義満</u>は、全国の商工業の中心で政権の所在地でもあった京都の市政権を掌握すると、京都の室町に造営した<u>花の御所</u>で政治を行った。将軍を補佐する管領をはじめ、有力守護大名は在京し、幕政運営にあたった。京都内外の警備や刑事裁判は<u>侍所</u>が司り、その長官には、足利一族の赤松・一色・山名・京極の四氏が交代で任命された。（また守護一族や有力地方武士を奉公衆に編成し、京都で将軍を護衛する直轄軍として育成した。）京都で高利貸しを営む土倉や酒屋に<u>土倉・酒屋役</u>を課し、京都の出入口である七口などで関銭を徴収し、幕府財政に宛てた。<u>応仁の乱</u>で主戦場となった京都は荒廃し、守護大名の多くも領国に下り、守護在京体制は崩壊した。

2 明治維新後の士族について，江戸時代の武士と比較しながら論述せよ。なお論述にあたっては，下の語句をすべて使用し，使用した箇所には下線を引いておくこと。

家禄　　佐賀の乱　士族の商法　　屯田兵　　苗字・帯刀

出題意図・採点基準

武士・士族の存在に注目して、江戸時代から近代への移行・転換について、また明治の国家が抱えた諸問題についての理解度を問う問題である。指定された用語を使用して、①江戸時代は政治・軍事を担う支配階級であったにもかかわらず、徴兵令・廃刀令などの維新政府の諸政策によってその身分・特権が否定されていくこと、②没落していく士族の救済が重要な政治課題となったこと、③佐賀の乱などの不平士族の反乱が相次ぎ、1877（明治 10）年の西南戦争鎮圧をもってようやく国内の動乱がおさまったこと、について歴史的・論理的に記述できているかを採点基準とした。

解答例

江戸時代の武士は、政治・軍事を担う支配階級として俸禄を支給され、さらに苗字・帯刀の特権を有していたが、維新政府の諸政策によってこれらが否定されていく。まず国民皆兵を原則とする徴兵令によって軍事制度を担う中核としての存在を否定され、さらに廃刀令によって帯刀の特権も奪われた。また政府が、金禄公債証書を与える代わりに、家禄と賞典禄からなる秩禄を全廃したため、官吏・巡査・教員などに転身できなかった士族は、商業に従事するもののその多くが失敗し、士族の商法と言われた。このような士族に対して、北海道開拓事業である屯田兵制度など、士族授産の道が講じられた。また江藤新平を中心とした佐賀の乱など各地で不平士族による反乱が相次ぎ、1877（明治 10）年の西南戦争鎮圧をもってようやく国内の統一が完成した。

(3) 10 世紀から 13 世紀のカトリック教会における教皇権の確立の過程について論述せよ。なお，論述するにあたっては，下の語句をすべて使用し，使用した箇所には下線を引いておくこと。

1122　　インノケンティウス 3 世　　カノッサ　　クリュニー　　聖職売買

出題意図・採点基準

カロリング朝フランク王国分裂以降のカトリック教会の状況とこれに対する一連の改革運動、とくにグレゴリウス改革の内容、教皇権の改革とそれがもたらした叙任権闘争の経過、その後の教皇至上主義の確立に至る過程、以上の点についての事実関係の把握と理解を問い、以上の諸点に対する理解を採点基準とした。

解答例

フランク王国のカロリング朝とローマ教会が提携して以来，司教や修道院長など高位聖職者は寄進による大領主となり，人事などで国王や貴族など世俗権力の影響を強く受けるようになった。このため聖職売買や妻帯などの弊害が目立つようになった。またフランク王国分裂後の政治的混乱もこれに拍車を掛けた。これに対して，10 世紀以降，フランスのクリュニー修道院を中心に修道院改革運動が起こり，これを受けて教皇グレゴリウス 7 世は聖職売買や妻帯を禁止するだけでなく，聖職者の任命権（聖職叙任権）も世俗権力から教皇を中心とする教会に移そうとした。神聖ローマ皇帝ハインリヒ 4 世はこれに反発し，聖職叙任権闘争が起こった。ハインリヒ 4 世が聖職者の人事を強行したことから，グレゴリウス 7 世は彼を破門し，反皇帝派のドイツ諸侯が皇帝の破門解除がなければ廃位すると決議したため，ハインリヒは 1077 年イタリアのカノッサで教皇に謝罪し，破門を解かれた。このカノッサの屈辱事件により皇帝の権威が弱体化した。1122 年のヴォルムス協約により皇帝と教皇の妥協が成立し，教会における教皇首位権が確立した。これ以後，ローマ教皇の権威は西ヨーロッパ社会全体に及ぶようになり，13 世紀インノケンティウス 3 世のときに教皇権は絶頂に達した。

4明の滅亡から清の建国に至る過程について論述せよ。なお、論述するにあたっては，下の語句をすべて使用し，使用した箇所には下線を引いておくこと。

三藩　　ヌルハチ　　八旗　　ホンタイジ　　李自成

出題の意図・採点基準

1644 年に李自成の反乱軍に北京を占領されて滅亡する前提として、北虜南倭以来の軍事費の増加による財政難があり、それに対する張居正による中央集権的な財政立て直しが国内の混乱を引き起こしていたこと

中国の東北地方で明の支配を受けながら農牧・狩猟生活を営んでいた女真が、初代ヌルハチのもとに八旗を編成するなど独自の国家建設を進め、第二代太宗ホンタイジのもとに 1636 年に清を建国すること

清の第四代康熙帝が呉三桂ら漢人武将を中心とする三藩の乱を鎮圧し、清朝統治の基礎が固まったこと

以上の諸点に対する理解を採点基準とした。

解答案

北虜南倭以来の軍事費の増加による財政難と、それに対する張居正による中央集権的な財政立て直しが引き起こした国内の混乱によって弱体化していた明は、1644 年に李自成の反乱軍によって北京を占領されて滅亡した。その東北方で明の支配を受けながら農牧・狩猟生活を営んでいた女真は、初代ヌルハチのもとに八旗を編成するなど独自の国家建設を進め、第二代太宗ホンタイジのもとに 1636 年に清を建国し、明の滅亡後、呉三桂ら中国人武将の協力のもと、中国全土へと支配を広げていった。第四代康熙帝になると、中国南方に置いていた呉三桂らによる三藩の乱が起こったが、鎮圧され、清朝統治の基礎が固まった。